The Spoken Language of Children
Its Varieties and Characteristics Seen in Literature
(part in the first half)

Chiake Toyoda

Abstract

This paper is an analysis of the spoken language of Japanese children described in the Edo period realistic popular novel Ukiyoburo by Shikitei Sanba (1776-1822).

The author separated the speeches into boys' and girls', and examined their characteristics. In the consecutive latter half of the research, the representative Meiji period novel Taira no Yorimasa by Higuchi Ichiro (1872-96) will be examined.

The research will probe into the literature written in the two periods; the Edo period in which people rigidly succeeded the manner of speaking of their own strata and the Meiji period where after synthesis people were allowed to rise in the society.

The final purposes of the study are to find out the changes in our spoken language through the two periods, and to learn how potent the school education was in forming children's speech after the restoration.
この幼児語の大部分は、現在でも使われている。延べ百二十年前の大江戸の市中に、すでに幼児語（赤ちゃんと美しい）が存在しており、その後大しめに遊遊（遊や遊）を導入し、命脈を保ってきたことになる。

原文

「この幼児語の大部分は、現在でも使われている。延べ百二十年前の大江戸の市中に、すでに幼児語（赤ちゃんと美しい）が存在しており、その後大しめに遊遊（遊や遊）を導入し、命脈を保ってきたことになる。」

と指摘された。

この幼児語（遊や遊）は、現在でも使われている。延べ百二十年前の大江戸の市中に、すでに幼児語（赤ちゃんと美しい）が存在しており、その後大しめに遊遊（遊や遊）を導入し、命脈を保ってきたことになる。

原文

「この幼児語の大部分は、現在でも使われている。延べ百二十年前の大江戸の市中に、すでに幼児語（赤ちゃんと美しい）が存在しており、その後大しめに遊遊（遊や遊）を導入し、命脈を保ってきたことになる。」

と指摘された。

この幼児語（遊や遊）は、現在でも使われている。延べ百二十年前の大江戸の市中に、すでに幼児語（赤ちゃんと美しい）が存在しており、その後大しめに遊遊（遊や遊）を導入し、命脈を保ってきたことになる。

原文
男児

一方、男児の様子、寺子屋帰りの子どもたちが、手習い在種も足も真っ黒になった姿で錦鶏に出る。お風呂の後は何をして遊ぼうか。遊びの相談である。男遊ば遊びの板つきの様子を説明する。

男児の興奮が話題になる。話しざわしが誇りに思って黙って遊ぶ。

手下の評価は上にしている。手下の指導者としての役割を果たしている。
男児の名は「金さん」である。また「亀吉」「又也」という名前もある。

男児の名の自称は、「オメ」を称する。自称は「角・丸・刃・てん」として用いる。このコール名は、男児の音楽の仕事、飲食店の仕事、また家族の呼称に使用される。

女児の名の自称は、「ワタシ」を称する。自称は「丸・刃・てん・角」として用いる。このコール名は、女児の音楽の仕事、飲食店の仕事、また家族の呼称に使用される。

次に男児の名の自称を例示する。「亀吉」は、男児の音楽の仕事、飲食店の仕事、また家族の呼称に使用される。

女児の名の自称を例示する。「又也」は、女児の音楽の仕事、飲食店の仕事、また家族の呼称に使用される。

以上が、男児の名と女児の名の自称の例示である。